九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもの喜びに導かれた折り紙作り ： 54歳からの体験学習

秋山, 幹男
広島文教女子大学

https://doi.org/10.15017/26726

出版情報：生活体験学習研究. 12, pp.35-42, 2012-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第12号　35－42（2012）

子どもの喜びに導かれた折り紙作り

― 54歳からの体験学習 ―

秋　山　幹　男*

Sharing Happiness with Children by Origami

― My Experience Learning from Age 54 ―

Akiyama Mikio*

Ⅰ．折り紙づくりを始めた経緯

１．折り紙修行のスタート時代

折り紙を始めて、もう満14年が経過した。通算して７万個を折り上げたことになる。年5000個の計算である。きっかけは筆者が幼年教育研究施設長（兼任）として赴任した大学の附属幼稚園の子供たちとの触れ合いである。ここで無謀にも取り組むことになった折り紙作りの悪戦苦闘の体験が、いつ頃から喜びに変わっていったかについては、すでに「広島文教女子大学教育相談センター年報」第10号(2002）に論文として掲載した（「折り紙は治療になりうるか」)。本論文は、この論文から一部抜粋し、また新たに補充し、まとめたものある。

「ツル」一つがまともに折れないのに、折り紙なら楽だろうと甘く考えて、園児達に声かけをした。何と、最初の園児からの要望は、「パッチンカメラ」(女児）と「手裏剣」(男児）であった。初っぱなから泡を食う状態に陥った。しかたなく若い園の先生に指導を乞い、何とかその時（その場）は約束を果たせたが、全くの冷や汗ものであった。

手裏剣は４人の先生に指導を乞うた。一番分かりやすかったＹ先生のやり方を見習い、その夜は必死で折り続けた。パッチンカメラも教えてもらったが、奴さんから両手を共応させながらエイヤーと広げて変形させなければならない。これがまた難しいのである。理屈がわからないままの試行錯誤の学習・取り組みであった。それでも、３・４回に一回は何とか仕上がった。これを翌朝一人の女児に手渡し喜んでもらった。

これでは先行きどうにもならないと思い、取り急ぎ職員室にあった幼児向けの折り紙本を開いてみた。ところがである、この書き方・描き方はさらに難解なのである。もうしかたがないので、時間を掛けながら、いきなり作品の頁をめくっての挑戦に入ることにした（折り方には、山折り、谷折り、かぶせ折りなどといった一定のパターンがあることは、半年以上たってからやっと気が付いた次第)。

男の子にはこれがいいかな、女の子にはこれかいなという程度からの開始である（前者は恐竜、後者はウサギや花)。６月の雨期には、Ｎ教頭先生にピョンピョンガエルの折り方を習い、園児達と楽しい遊びに発展させることができた。卵ホールは急遽競技場に変身した。どうにかこの頃から面白くなりかかっていた。

何よりの大発見は、山口真（1993）さんの「やさしいおりがみ百科」が、職員室の本棚にあったことである。いろいろなジャンルに仕分けされており、

*連絡・別刷り請求先
〒731-0222　広島市安佐北区可部東３丁目９－15
Ｅ－mail：mik-akiyama@mua.biglobe.ne.jp

実に魅力に溢れた作品群であった。これらは、やさしい・やや難しい・難しいと難易度が３段階に分けてまとめられていた。まずは、無謀にも難しいとされた恐竜に挑戦してみた。やはり四苦八苦ではあったが、何とか折り上げられたではないか。折り上げたので、次は数をこなすことに徹した。とにかく本を見ないで手で覚え込もうと考えたのである（これがよかった)。園児達はびっくりしてくれた。喜ぶ男児たちの笑顔がそこにはあった。貰った一人ひとりの瞳は輝いていたのである。この笑顔と瞳を見せられれば、もうやり続けるしかあるまい！

２．まだ未熟ではあったが欲も出始めた頃

こうなるとすぐに調子に乗る私は、その笑顔と目の輝きを求めてのめり込んでいった。兎にも角にも、折れる作品のレパートリーを広げることに努力する日々がスタートしたのである。11月からは、男の子たちと卵ホールに大きなテーブルを置き、恐竜ランドや文教動物園を模造紙の上に貼り付けて仕上げた。アイデアの提供者はもちろんのこと子ども達である(昔の木や草も貼り付ける)。女の子とは、お花作りが主流であった。茎はストロー、葉っぱは紙に色づけして鋏で切り、糊やテープで茎に貼り付けた。「根がいるよ」と言ったのも一人の女児だった。

振り返ってみて、何よりも折り紙制作の持続に貢献した秘訣の一つは、使用済みの包装紙を四角に切って利用したことであろう。包装紙の柄と色を活用することで、想像力が高められたのである。保護者の方からも包装紙の寄贈が始まった。このデザインと色合いならば、ゾウさん、トリケラトプス、ウサギさん、ネズミだ、ペンギンだ、イルカだ、と頁をめくり続け折り上げていく毎日。まずは紙を選択し、次に折り上げ、折り方をマスターすると手に覚え込ませるために折りまくった。それを、子どもたちはどんどん家に持ち帰ってくれた。そうこうしているうちに、やっと折り方に一定のパターンがあることに気付いたという次第なのである。また、紙一枚でなくてもよいことは山口氏から学んだ。二枚・三枚組み合わせても OK なのである。さらに、糊もセロテープを使ってもよしである。ここまで自由ならば、自分なりの変形・オリジナルなものを創り出してみたくなるのは当然の道筋か。

まずは、セロテープと紙３枚で立体的な飛行機づくりに挑戦した。このきっかけは、ある園児が私に作品を依頼（注文）してくれたことから始まった。彼の要求は「じゃるを作って」である。“じゃる・ジャル・フアット・イズ・イット？”である。無い頭を働かせ、彼の言葉に耳を傾け続けて、やっとのこと納得。ゆっくりと聞いてみた。「じゃるって飛行機の JAL の事？」 彼は嬉しそうにコクリと頷いたではないか。少し大きな紙、糊、セロテープなどを総動員させて文教式 JAL がその後完成した。喜んでその作品を家に持ち帰ってくれた。次は、もっと大きな飛行機づくりに取り組み、カレンダーの紙とガムテープを使った。翼に JAL の字を、尾翼には日の丸をカラーマジックで描き込み、ホールの柱にぶら下げた。すると、すぐに園児達の注目の的となった。先生方も嫌な顔をせずに無視してくれた。長いことぶら下げていると、翼が下がりだしてきた。これをボーッと眺めていたら、それが鯨に見えてきた。そこでまずは、動物図鑑を開き、鯨のスケッチに取り組んだ。その描いたものを目の前に置き、じっくり鑑賞してみることにした。そのうちにクジラのイメージが少しずつ浮かんできたではないか。これにはやはり飛行機と同じ３枚の大きさの違う紙を用意した。出来上がったクジラには色も付けてみた。何でもそうであるが、そのように見えたら（イメージ化できたら）成功なのである。

ここまで辿り着いた頃、保護者のＴさんが注目してくださった。秋山先生の折り紙教室が保護者を対象にして始まった。折りたいテーマに合わせて、材料の包装紙は持ち込まれた。一番人気は、クワガタとカブトムシであった。園児達からはしっかり覚えてくるようにという要望付きであるから、お母さん方も集中して取り組まれた。そんな何回目かの時、アイデアマンのＴさんが「ゾウ」の折り紙にしっぽを付けたのである。それは、単に折り込むのを引っ張り出しただけではあったが、私はその時新鮮な印象を受けた。多分、私なりのオリジナルを創りたいという思いの発芽がこの時にあったようだ。飛行機から鯨へという試みが、よりそのものらしく（動物らしく）していきたいという要求（挑戦）が本格的に始まり出した。

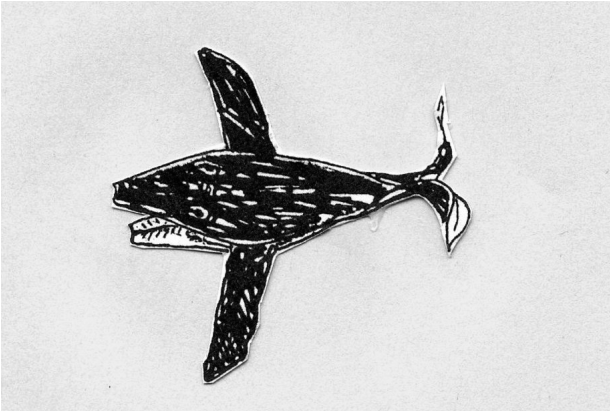

図１．創作折り紙「クジラ」

３．園や園児達の変化

できれば１クラス全員と一緒に、折り紙教室を開きたいものだなと考え始めた頃、年中・年長クラスの交流会でこの希望は叶えられた。園児達は、親子であるいはお祖母ちゃんと一緒に楽しい一時を過ごしたのである。机間巡視をしながらたくさんのペアーに実技指導ができるようにいつの間にか私はなっていた。クラス担任のＫ先生も、事前に指導を受け、模造紙に折り方を大きく描いて黒板に貼りだしておいてくれた。幼児を相手にしての１時間の持続は記録ものである。保護者と一緒だったから楽しめたのであろう。(註、当時の附属幼稚園は、年中と年長を一緒にして縦割り保育を実施していた。)

一方、個人的には４年の間に、たくさんの園児が職員室にいる私の側にやってきた。園にいる時に孤独であったことは一度もなかった。また、切れることなく園児達はのめり込み、代々私の助手役をも務めてくれたのである。もちろん子どもにもよるのだが、ある程度継続してアシスタントをし、それなりに満足した後は、少しずつ遠のいていき他の遊びに移った。そして彼らは熱中した遊びに対してリーダー性を発揮する。卒園後も幼稚園の運動会や秋祭りには顔を覗かせてくれる彼らの心の中には、しっかりと私との折り紙体験が記憶として残っていた（本当に嬉しいことである)。彼らは、園行事の秋祭りの時には私の担当するくじ引きコーナーの呼び込みと後輩園児への折り紙の入った封筒の手渡しを手伝ってくれた。１・２・３の数字を書いた割り箸を箱から抜いて、折り紙作品の入った外れ無しの封筒を３つの箱から一つ貰うという、ただそれだけのお粗末なお店だったが、祭りのために用意された法被を着て４年間続けたのである（チラッと封筒の中を覗く、買い物客である在園児達の嬉しそうな顔がはっきりと思い出される)。

たかや君（今はもう高校生）は、無類の恐竜大好き園児であった。次々と私の折り上げる恐竜を家に持ち帰ってくれた。そんなある日、「新しい恐竜を折ってほしい」という希望を出してきた。その時までに折れる恐竜は５種類である。彼の期待を裏切りたくない私は、ニュー恐竜をプレゼントする約束をしてしまった。ヘビを変形させながら何とか折り上げられないものかと思案し続けた。そこで誕生したのが、この地球上には決して存在しなかったであろう『タカヤザウルス』である！２体を手渡す前には彼の反応が気になったのだが、それなりの喜びを現してくれた（ホッ)。ご両親からは、後日船や恐竜の折り紙本を戴いた。この２冊は、大切な記念品として書斎の本棚に収まっている。

図２．折り紙づくりの職員室風景

図３．折り紙「タカヤザウルス」

４．折り紙先生の独り言　― 保護者への便り ―

最初の２年半は、月１回発行される園だよりの巻頭言（月々のあいさつ文）を担当していた。ところが、そこばかり見て肝心の連絡事項まで目通しがなされない危険性が出てきたということで、その後は事務連絡だけの園だよりに切りかえられた。そこで、結果的にはたった一回だけの便りになってしまったのだが、私作成の“独り言”を配布してもらうことにした（2000年10月23日）。

折り紙を始めてから、２年と半年が過ぎました。園児から戴いたニックネームをタイトルに用いさせてもらいました。何事も目標を持ち、一生懸命コツコツと取り組んでいれば、こんなにもたくさんの種類の折り方が身に付くんだなと、我ながら驚いております。「○○○を作っておいてよ」「これはどうして折るん？」「先生はどうしてそんなに本を見ないで折れるの？」「僕も折ってみよう。先生ここはどうすればいいの？」折り紙遊びにも発達の過程がみえてきます。おねだりの子、「あきやまッ」、「久しぶりじゃね」、１ヵ月以上経って「頼んだの作ってくれた？」(頼まれた日に折っておいたのですが、受け取りにこなかったんですよ、このお子さんは…。他の子が自分の欲しかった折り紙を持っていたので思い出したんでしょうね)、クワガタの折り方をマスターしてお母さんをびっくりさせたＲ君、熱心に折り紙の本をのぞき込みながら何とも誇らしげな顔、いいですね！　どれもこれも。「あきやまッ」と親友のように扱ってくれる年中さんには、しらん顔したり、「誰に言っているの？」とよく言いたくなりました。「親しき仲にも礼儀ありよ」と言いたかったが、“やっぱり自分たちの仲間に感じてくれているからこう呼ぶんだろうな”と考えることで、“マーいいか!!”

２年と半年もズッーと折り続ければ、見ないでも作品が折れるんですよ。継続は力なりですね。今はやはり続けて良かったなと心底思います。日には50～100も折らねばならない時もあり、なんでこんな事を始めたのかと自分で自分を恨んだりしたものでした。でも子ども達の目が、言葉がここまで私を導いてくれたのだと感謝しています。まさに園児一人ひとりが私の先生なのです。その先生方が「上手に折れるね」、「ほうよ、こんなんが欲しかったんよ」、「あきやま、○○頼んだで」、「今度はいつ来るの」、「貰った折り紙は宝箱に入れてみんな持っているんよ」。このように言ってくれる園児の顔が声が頭に浮かんだり響きます。“アッ、彼の頼みを忘れていた”と思い出したり、年少さんの欲しいのだけれど自分から言い出せず、少し離れたところから、指をくわえてジッとみていた姿を思い出しながら、とにもかくにも折り続けてきました。秋祭り（10／28）には、無料くじ引きコーナーを担当します。もちろん賞品は「折り紙」です。お出かけください。首を長～くして待っていますよ。

Ⅱ．研究施設長兼任が終了したその後10年間

１．子供たちとのその後の出会いと関わり

１－１．附属幼稚園

若い園長は、４年間を務め上げられた後、４月より副理事長に就任されることに決まった。そこで幼年教育研究施設長であった私も、兼務を解かれ大学の仕事オンリーに戻ることができた。３月の退任式では、涙々の別れが展開した。園児達手作りの贈り物がその後研究室を飾り、今では書斎に保管されている。３年保育の園児達を２度も完全に見守り続けるという貴重な体験は、超一級品である。いろいろな事情を抱えた園児達との共同生活は、54歳からの折り紙挑戦体験と同じく深い深い想い出となって残っている。

附属幼稚園との縁はその後もズッと継続され、「折り紙先生」・「折り紙博士」の名称は代々申し送られてきている。今では、全園児に配ってもらう為に折り紙をたくさんため込んではお届けしている。

時々は、クラス単位に大きな作品を届けることもある（最近の作品は、パンダ親子）。

１－２．退職後１年間の非常勤勤務の時の子ども達とのかかわり

① 広島市内の私立M幼稚園（年長さん達62名）との関わりについて（2009年の約半年間）

私達の息子２人も３年間通った幼稚園であり、ずっと理事長先生や園長先生とも親しくしてもらってきている。無理は承知と覚悟を決めて、先に電話を入れて予約を取り、４月初旬折り紙作品（十二支）を抱えて出かけた。月１回の火か金曜日に折り紙指導をさせてほしいという願いは、意外と簡単に受け入れてもらえ、すぐ以後の打ち合わせに入った。

11月にインフルエンザで学級閉鎖があつた為、計５回の訪問で折り紙教室が開催された（５月、７月、９月、10月、２月）。何と何と年長さん62名が相手の指導なのである。園長先生、年長児の担任、男先生などが全面的な協力体制に入った。先生方が熱心に覚えようとしてくださったので、随分と楽ではあったが、毎回一度にワァーととりかこまれて、「どうするの」、「ここは分からん」と言われ続けた訪問であった。最初に園長先生の挨拶があり、続いて私の言葉掛け（説明など）で折り紙教室は開始される。

訪問１（５月８日13:30～14:30）：年長さん全員の前で話。折り上げた作品を園児全員にプレゼントした。次回は全員に「ウサギさんをプレゼントします」と約束して別れる。

訪問２（７月３日10:30～12:00）：約束の折り紙「ウサギ」は、最後の折り方を指導するため途中まで折り上げた作品をみんなに手渡した。それでも園児達にはかなりの戸惑いがあった。

訪問３（９月29日）：午後15分遅れて入園。すでに園児達は大広間で待っていた。お返りの時間があまりないので、持ち時間20分で作業をした。訪問前に脱脂綿を用意してもらっていたので、大きな見本を見せながら、私がすでに折り上げていた「ヒツジ」に脱脂綿を巻く仕事をしてもらったのである（このヒツジ作品は、附属幼稚園の園児に言わせれば、イヌにしか見えなかったようなので、一工夫加えて脱脂綿巻きにしたのである）。上手に綿を巻き込んだら見せにきてもらい、用意してあった「トンボ」をプレゼントした。これが意外に好評だった。

訪問４（10月29日12:40～13:40）：前回に懲りて12時に園着。事前に折り紙用紙とハサミの準備をお願いしておいた。この度は「タツ（ドラゴン）」である。大きな紙で折って見せながら、全行程を折り上げてもらった。先生方も熱中し、各々が園児達に指導してくださった。それでも分からない園児には出かけていき、直接の指導である。自分で折り上げた時の満足そうな顔々々。うち解けてきた園児達との別れの挨拶は、「ありがとうございました！」大きな声であった。全員が退室するまで見送った。

訪問５（２月15日13:00～ ？ ）：始まるまでに何人かの先生に折り方の指導をした。この日初めて理事長先生にお会いできた。十二支の中から選ばれたこの度の動物は「サル」であった。割合と簡単な折り方ではあるが、出来上がった作品の顔に筆ペンで描き込むという作業が待っている。先生だけでなく園児も慣れてきたようで、和気藹々の雰囲気が醸し出されていった。最後の私の挨拶は、“小学生になってもしっかりと頑張って下さい。楽しい時間をありがとう！” 返事は大合唱の「ハーイ、頑張りま～す」であった。何度も振り返り手を振ってくれた62名の園児達の未来に祝福をと祈る。

② 広島市立Ｆ児童館での触れ合い（小１～小３：20名）（2010年12月24日・クリスマスイブの日 10:30～12:00）

2010年の５月頃、手紙でＦ公民館の職員の方に頼んでおいた児童館での折り紙実践が、やっと12月に実現した。事前に職員の方と児童館を訪問し、折り紙十二支をプレゼントした。感動してくださった館長さんとの話し合いの結果は、来年のエト「ウサギ」を折ることに決まる。イブの当日は、大きなビニール袋にプレゼント用の折り紙を一杯詰め込んで持参した。自称サンタじいさんの登場である。職員の先生を含めて、大広間で折り上げの開始である。これまでとは違い、対象は小学１～３年生の20名である。大きなカレンダーの紙で作った「ウサギ」の完成作品を見せ、解体して折り上げてみせた。みんなのテーブルの上にもやや小さい見本を置いておく。“「ウサギ」は三角攻めです。すべての行程を三角三角で仕上げていくんです” 最初は斜めに構えていたある男

児も、中盤位から途中まで折り上げた作品を持ってきて、「次はどう折るん」と乗ってきた。男女児とも熱心に取り組んでくれた。完成させた後は、サンタじいさんからのプレゼントを袋から長テーブルに出して並べ、列んで一つずつ受けとってもらった。10種類以上はあったと思う。児童達はお礼の挨拶後、別室に戻り、お弁当持参の昼食に入っていった（玄関での最後の別れも感動的であった)。

事務室で昼食を戴き、今日の行事についての話し合いをした。えらく褒められたのであるが、お別れの時に手渡された立方体の折り紙は「奥さんへのお土産です」というので、持ち帰って開いてみたら、平面上に並ぶのだが六段の雛飾りになった。これは立派な大人の折り紙作品である。“ウーン（絶句)”

③　ＪＲ車内での思い出２つ

③－１．新幹線での３～４歳男児とお母さんとの触れ合い（通路を挟んで「恐竜」をプレゼント － 福山駅～新大阪駅まで －)

乗車して座席に座った彼は、早速ウルトラマンの絵本を開いていたのだが、新倉敷駅近くになる頃にはもうムズムズが始まり出した。そこで、恐竜の折り紙を作り彼の目の近くに出して、“貰ってくれる”と声かけをしてみた。彼はその恐竜を喜んで受け取った。すぐに一人遊びが始まった。私は、どんどん他の恐竜を折ってはプレゼントした。もう夢中で恐竜同士を闘わせたりの遊びが展開していった。そうこうしている内に、あっという間に新大阪駅に着いてしまった。「どうして静かにさせようかと思っていましたので、大変感謝です」とお母さんは言われ、すぐには立ち去らずホームでのぞみが発車するまで手を振り見送ってくださった。

③－２．熊本駅から博多駅までの特急での出会い(空の虫籠と昆虫採集網を持った幼い兄弟とお母さん)

熊本駅ホームで、お祖父さんとお祖母さんの見送りを受けながら３人を乗せた特急列車は発車した。虫かごには何も入ってはいなかった。おとなしく坐っている二人にまたまたお節介なことを始め出した私であった。反対の座席にいたので、折り紙を作っては“どうぞ”と手渡した。初めはビックリしていた二人であったが、だんだん乗ってきた。虫籠に入れながら折り紙一つひとつに興味津々状態となってくれた。ここでもあっという間に博多駅到着。お母さんから「幼稚園の園長先生ですか」と問いかけられたり、お礼を言われた。どうもはなはだお節介ではあるが、幼い子を見るとついついプレゼントしたがる私なのである。

２．大学での女子学生との折り紙教室

２－１．大学でも折り紙作りは続けられた。心理学科を新しく立ち上げたので、オープンキャンパスで学科紹介を担当する役が回ってきた。そこでも毎回折り紙作品を並べ、説明を聞いてくれた高校生にプレゼントした。次第に昂じていきとうとう折り紙コーナーを設けたら、保護者と一緒に来学してくれた高校生が親子共々次々に坐って楽しそうに折って行ってくれたのである。このお陰で心理学科に入学した人もあることが後で分かった。折り紙は、他の学科希望の生徒さんにも好評であった。

２－２．2008年度のオリゼミに、指導ボランティアとして参加した初等教育学科３年生のＭさんは、私の折り紙作品に大変興味を持ったようである。１年後研究室に訪ねてきて、教えてほしいということになった。教員採用試験に入る前の４月から６月にかけて６回の折り紙教室が研究室で放課後開かれた。彼女を含めて計５名の４年生が都合をつけながら参加してくれた（４月13日／４月20日／４月28日／５月18日／５月25日／６月１日)。児童教育コースと幼児教育コースの学生さん達である。

１回目（４月13日)：４名。ティラノサウルス、２回目（４月20日)：２名。トリケラトプスとキリン、３回目（４月28日)：３名参加。何を折ったかは不明、４回目（５月18日）16:30～19:00：４名の参加。話し込んだが、何を折ったか記録無し。折り方は複写して手渡すことにした。５回目（５月25日）３名。タツとヘビ、６回目（６月１日）16:40～17:45：４名。イヌ、ヒツジ、トラ。７回目（６月８日）事前の連絡は無く、来室せず。後にＭさんに声かけをしたが、忙しくなってきていたらしかった。彼女らにとって、幼稚園や保育所に就職する場合には大いに役立ったことであろう。

２－３．初等教育学科の幼児教育コースでは、「自然」の授業がある。ある日担当M教授から、理科室で折り紙指導をしてもらえまいかという依頼があった。たっぷり90分机間巡視しながら30名位の学生さんと折り紙を楽しんだ。ゾウとキリンは覚えているのだが、後の折り紙が何であったかは忘れてしまった。これが「自然」という授業とどう結びつくかは不明であったが、教授はとても感動してくれたようだ（たくさんの写真を戴いた）。

３．折り紙が地域との交流に結びつく？（“折り紙を貰ってくださいますか”で始まる厚かましさが勝負）

とうとう昂じて、十二支に挑戦することになった。10の動物はすぐに折れたのだが、どうしても「ウシ」と「トラ」の全身作品のモデルがないのである。困っていたが、救いの神が現れた。隠れている配線のイメージを描きながら作業をされる電気工事の方が、「ウシは尾から頭まで真っ直ぐでしょう」というヒントをくれたのでピーンときた。トラは、宮島焼きの川原厳榮堂の末娘さんが言ってくれた「トラは猫でしょう」というヒントで直ちに響くものがあった。ただしこのトラは、顔だけでなく全身にも筆ペンが必要となった。以後、筆を使った顔描きなども折り紙作品作りに付け加わる。これがまた結構評判がいいのである。

① 広島市立安佐市民病院「支払い窓口（H信用金庫）」

６年続いている月一回の作品届け：子どもさんとお祖母さんに好評とか。希望者には持ち帰りとなっているそうで、いつも窓口は空っぽになっている。

② 島根県吉賀町・六日市ゆらら温泉「フロントと食堂」

４年間夏の宿泊時にはいつも作品を持参する。宿泊時にも折ってはプレゼント。

③ 広島市立佐東･三篠公民館への折り紙プレゼント

2010年度に講演・講座などを担当させてもらった。館内の展示用や配布用として利用されていた。

④ こころの病院におけるクリスマス行事での体験

１年目はプレゼントコーナーを開設させてもらった。２年目には折り紙作成コーナーを開いた。少人数の参加者ではあったが、熱心に乗ってきてくれた患者さん達であった。

⑤ 住んでいる可部の町における“折り紙貰ってくださいますか”運動

随分と多くの場所に配り続けてきている。迷惑をかけているのかどうかは、問い合わせが恐いので不明のままである（本人は喜んでもらっていると一方的に思い込んでいる）。

⑥ 東京有楽町・相田みつを美術館

初訪問の時、受付で“折り紙作品貰ってくださいますか”と声を掛けたところ、館長室に電話してくださり、お会いすることができたのである。以来、上京した時には必ずここを訪問するのだが、いつも館長さんにお会いできるという幸運が続いている。

⑦ 東大阪市・司馬遼太郎記念館

受付コーナーに向かって右隅に、毎年エトの折り紙を飾っていただく。不思議なご縁があり、毎年エトの折り紙を郵送させてもらっている。

図４．折り紙十二支

III．折り紙は治療として使えるか

2002年の論文でもこの事には触れている。その後、アメリカで折り紙療法の提唱者がいるということを知った。「誠信プレビュー」（107号）に掲載されていたものである。小林（2010）の「エンリッチメント折り紙療法」がそれである。彼女は、アートセラピーをニューヨーク大学で学びながら、イメージや型にとらわれない自分勝手な折り方でよいと気付いた時に、療法への応用が芽を出したのである。

この度も、折り紙療法の可能性について私なりの提案をしてみたい。遊びながらリラックスできる作業として利用できるはずである。

①　折り上げるという楽しみがある。
②　夢中になるとアッという間に時間が過ぎ去る(大人では２時間位は十分大丈夫である)。
③　何度も折り上げることで集中力が身につく。
④　作品を喜んで貰っていただくという嬉しさがある。
⑤　包装紙が再利用できる。その柄や色合いで、種々のイメージが浮上する。
⑥　飾った後の処理には、勇気と決断力と感謝の心がいる。
⑦　仲間との共同作業が可能である。集団療法としての可能性は大きい。

今のところ、まだ治療としての実践はスタートさせていない。一緒に挑戦してみたい方はおられないだろうか。

文　献

秋山幹男　2002　折り紙づくりは療法になりうるか　広島文教女子大学教育相談センター年報　第10号　67-76
秋山幹男　2010　著作集１　謙虚で優雅は心の火種　―＜私＞という人生の道行き ―　あいり出版
秋山幹男　2010　出会いという関わりについて（その２）― 指導教員とゼミ生における相互理解のスタートライン ―　日本パーソナリテイ心理学会第19回大会発表論文集　36　(10月10日 ポスター発表　P1-18)
小林利子　2010　折り紙の可能性―エンリッチメント折り紙療法　誠信プレビュー　107　3-6
高橋春男　1968　おり紙きり紙全集　泰光堂
山口　真　1993　やさしいおりがみ百科　西東社